

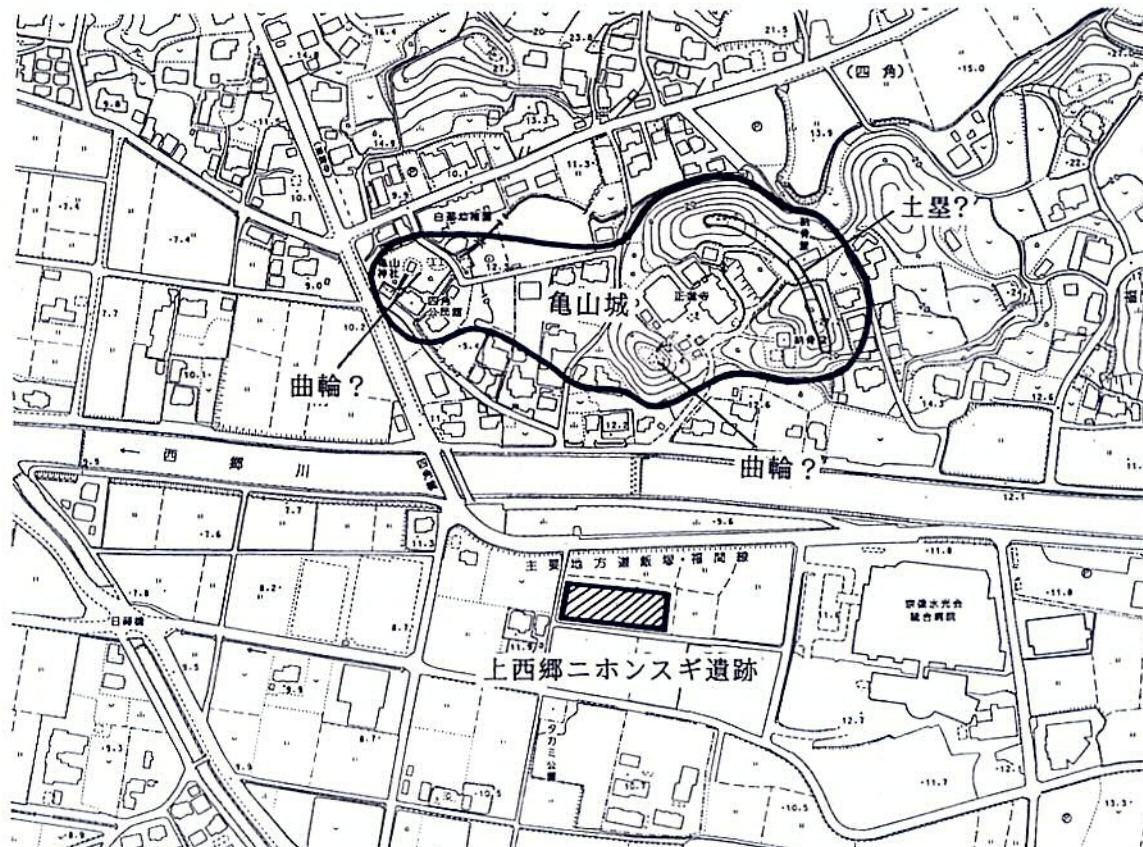
かみさいごう
上西郷ニホンスギ遺跡 現地説明会

1. 調査概要

調査地	福岡県福津市上西郷 332
調査面積	2,000 m ²
調査原因	福間駅東土地区画整理事業
調査期間	平成 21 年 10 月～平成 22 年 3 月
調査主体	福津市教育委員会
遺跡の時代	戦国時代 (15 世紀後半～16 世紀)
確認された遺構	掘立柱建物 19 棟、溝 12 条、土坑 30 基、柱穴 500 基、井戸 1 基
主な出土品	瓦質土器、かわらけ、貿易陶磁器、渡来銭、 ^{こうがい} 筈 ^{そく} 、土鍤

2. 位置と地形

上西郷ニホンスギ遺跡は西郷川中流域の低地にあり、標高は 8m 前後である。現在の海岸線からの距離は 2.3 km。遺跡は旧西郷川にかなり近かったようで、北側に河川の浸食らしき痕跡が見つかった。試掘調査では、東西北の隣接地は砂泥の脆弱な水成堆積であって、旧来の湿地と思われる。試掘では調査地の周囲に遺構の広がりは見つかっていない。



遺跡位置図 S : 1/5,000

3. 歴史的環境

①西郷について

遺跡の位置するこの地はかつて西郷と呼ばれていた。西郷の範囲は定かではないが、上西郷、下西郷、手光と呼ばれる地域に相当するようである。西郷は宗像郡に属し、宗像氏が治める地域であった。しかし鎌倉時代に少弐氏の手に移り、その少弐氏は筑前国守護となる。15世紀には貿易港博多を狙う中国地方の有力守護大内氏が九州に進出し、筑前国守護となって宗像はその支配下に入る。大内氏は少弐氏の領土であった西郷を直轄領とし河津氏ら家臣を配置した。弘治三年（1557）大内氏が滅んだ後、宗像氏は中国地方の戦国武将毛利氏と手を結び大友勢と戦うが、毛利氏撤退により大友氏と和睦することになる。このとき西郷は宗像氏によって大友氏側に割譲されることになった。

②亀山城と河津氏

大内氏が河津氏に西郷を与えたのは15世紀後半とみられ、河津氏が亀山城を代々居城にしたと伝わる。天文元年（1532）大友方が「西郷亀山ノ邑城ニ居住」する河津隆業を「襲攻」するも、隆業自ら敵将を返り討ちにしたという（『河津伝記』ほか）。隆業の子、河津隆家は西郷の割譲に伴い、元亀元年（1570）大友氏の命によって宗像氏から殺害された。

位置図に示すように、本遺跡の北方至近にある小高い丘陵が亀山城と推定され、山林には曲輪とみられる平坦部や段落ち、土壘らしき地形が残る（註1）。また現在の亀山神社から正蓮寺境内付近をかつては「切寄せ」と呼んだらしい。『筑前国続風土記拾遺』に「亀山古城下西郷村切寄に在、山上平地二畝許、（中略）周廻に堀有」とある（畝は約100m²）。『福岡県地理全誌』には「亀山城址 切寄ニアリ山上平地六畝許、周廻に堀アリ」とある。

最近の研究では、亀山神社と周辺に堀状の地割がみられ、堀で囲まれた丘城部分と平地居館が共存する城館的な様相を持つ城郭ではないかという指摘がある（註2）。亀山城については土砂の採掘などで旧地形が失われ不明な点が多い。現状においては「周廻に堀」があり「居住」していたという記述が亀山城の実像に近づくための鍵と考えられる。

4. 出土品

①土器・陶磁器

土器はかわらけと瓦質土器が多い。かわらけは素焼きしただけの土器で皿や壺がある。かわらけの用途は食器や酒盃であるが、灯明皿としても使用された。大内氏系らしき壺が少量ある。瓦質土器は灰色を呈す焼成焼きの土器で、調理具の擂鉢や足鍋が出土した。特に足鍋は防長地域（周防・長門、現山口県域）を中心に分布する防長型瓦質土器と呼ばれる類で、15世紀後半から16世紀にかけての形式とみられる。

陶磁器には国産陶器と貿易陶磁器がある。国産陶器は備前焼の擂鉢と須恵器系陶器甕の破片が少量出土した。貿易陶磁器は中国明時代の青花（染付磁器）、白磁、青磁、朝鮮王朝（李氏朝鮮）時代の施釉陶器がある。これらは大内氏の博多貿易や宗像氏の朝鮮貿易によってたらされたものであろう。

③渡来銭

銭貨は8枚出土した。北宋銭の「治平元宝」と「政和通宝」、明の「永樂通宝」、朝鮮の「朝鮮通宝」各1枚と錢文不明4枚である。15世紀に朝鮮で使われていた「朝鮮通宝」に関連して注目したいのが、宗像氏の朝鮮貿易の歴史である。宗像氏は応永十九年（1412）から永正元年（1504）までの92年間に、記録に残るだけで40回の使者や貿易船の派遣をしている（『李朝実録』ほか）。

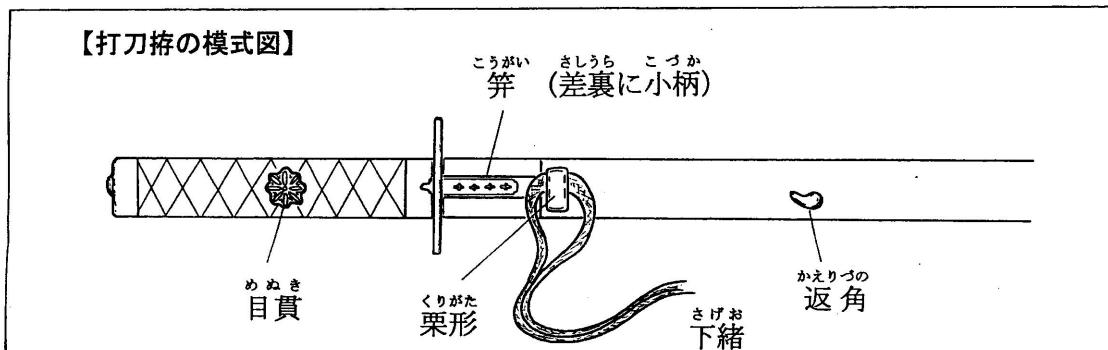
④土錐・浮き

土錐が28点出土した。出土品は管状土錐と呼ばれる類で、ほとんどが重さ5g、長さ3cm前後と小型品である。小規模な魚網や投網など河川の漁で使われたのであろう。

加工された軽石が出土した。土錐とともに魚網に付けた浮きと考えられる。軽石は火山または海底火山の噴火で生じ海岸に漂着する。

⑤笄

笄は頭髪を整える理髪の道具であるが、刀に装着される場合もある。兜や冠帽でかゆみを生じた頭部を搔く日常の用から、鎌倉時代頃に腰刀の鞘に装備するようになったらしい。腰刀は鐔のない短刀で日常の腰の物や、太刀の差し添えにした。太刀は刃を下にして腰に緒で吊るし下げる。その後、笄の装着は同じく帯に差す打刀に継承される。打刀は刃を上にして帯に差す刀で、徒歩戦が主流となる室町時代に太刀に代わって普及した。後に差し添えの短刀とあわせて大小と呼ばれるようになる。刀の装備を「拵」という。刀によって異なるが、下図に笄を含む例を示した。目貫は刀を握ったときの手留め。小柄は雑用に用いる小刀で緊急時に投げ打つことも。返角は拔刀時に鞘が抜けないようにする。出土品は銅製で裝飾がある。笄は帯刀した人物の往来または居住の傍証であろう。



5.まとめ

調査では大内氏が西郷に家臣を配置したという文献史料に一致する内容の出土品が見つかった。立ち並ぶ建物群は溝によって区画され、短冊形地割の町屋に類似する（註3）。亀山城と本遺跡の関連については検討中であるが、調査成果は西郷と亀山城に関わる歴史および戦国期城郭周辺の様相を考察するための重要な資料と言えよう。（井浦一）

（註）註1：図中の亀山城の範囲と遺構は『福間町遺跡等分布地図』を基に踏査し作成した。

註2：中西義昌編 2001『歴史資料としての戦国期城郭（地域資料叢書5）』による。

註3：九州歴史資料館岡寺良氏にご教示いただいた。

10M
0

上西銀ニホンスギ"遺跡、遺構配置略図 ($\delta : 1:300$)

